

「書く」意欲を高める国語科指導に関する一考察 —「言葉を創り出す」ための写真や絵の活用—

内田 由香利

九州女子大学人間科学部人間発達学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2019年10月31日受付、2019年12月11日受理)

要 旨

「書くことへの意欲を高める」授業を目指し、児童生徒の身の回りに多く存在する写真や絵の効果的な活用について、まとめたものである。書く為の取材段階で「写真や絵を読む」という視点を取り入れる。そこに描かれている内容について想像したり、自分なりの解釈を加えたりしながら、図像を言葉に変換する作業は、「言葉を創り出す」ことであり、国語科において取り組む価値があると考えられるためである。個人の考えや経験等の違いにより、同じ絵や写真から創り出される文章は異なる。自由性もある。それだけに、出来上がった作品を読み合う際の、面白味も増す。さらに、文章の内容を読み解き、書いてあることについて自分の考えを書くよりも容易であるため、児童生徒の書くことへの抵抗も少ないという利点もある。しかし、「書く意欲を高める」という視点からは有効かもしれないが、構成力や記述力等の「書く」能力の育成の仕方については、今後発達段階に応じて整理していかなければならない。

はじめに 一本研究の目的—

「書くことは考えることだ」といわれる。書くことには思考が伴い、「書いている」時点で「考えている」ということになるためだろう。頭の中で、もやもやしていることを紙に書き出してみると、整理されすっきりすることが多い。そのため、頭だけで考えるよりも、深く思考することができる。しかし、「書くこと自体が面倒くさい」「書くことがない」「書き方が分からない」等の理由を挙げ「書くことが苦手」だという児童生徒は多い。教育の大きな目標として、思考力・判断力・表現力の育成が掲げられる現代である。「書くこと」を通して、児童生徒の思考力を高めたいものである。また、文章を書くことで考えを整理させ、自分の思いや考えを表現する力も身に付けさせたい。児童生徒の身の回りに存在する多くの写真や絵、それらを活用して、まずは「書くことが好き」「書きたいことが湧き出てくる」という「書くことへの意欲を高める」児童生徒を育成できないかと考えた。例えば、国語の教科書(学校図書4年下)に「ミニギャラリーの解説委員になろう」という学習がある。絵を見て感じたこと、想像したこと等を伝え合い、絵を説明する文章を書くという単元である。また、「一枚の写真から」(光村図書5年)という一枚の写真を出発点として、想像力をふくらませ、物語を創作する単元も設定されている。これらの学習では、「写真や絵を見て想像を膨らませ、考えた内容を書いて表現させる」という言語活動により、児童から多くの言葉を引き出すことができる。言葉で考えを伝え合いながら、主体的に「書く」活動に取り組む姿も見られる。国語科の授業において、これら写真や絵を教材として効果的に活用すれば、「書きたいことを見つける」という取材活動が容易にできるため、文章を「書く」意欲が高まるのではないかと考える。

神戸大学名誉教授である浜本純逸氏¹⁾は、第44回日本国語教育学会西日本集会(福岡大会)の講演の中で次のようなことをお話しになった。

これからの国語教育の新しい課題として私がやってもらいたいことは、「見ること」です。「見ること」を学習指導要領の、話すこと・聞くこと、読むこと、書くことに加えてはいかがでしょうか。映像や写真と合わさって言葉が何かを伝えることがあります。見るときは八割がた動作やパフォーマンスで理解できますが、真ん中に言葉が必要です。その人が使用する言語によって虹が七色に見えたり三色に見えたりしますね。三色に見えるのは色を表す言葉が少ないからです。写真と言葉で見ると、この内容を国語教育でどう系統化するかがこれからの課題だと考えています。(講演記録より)

映像や写真から言葉を創造する学習の可能性について示唆し、言葉を扱う国語教育において、系統的に指導する価値のある内容であることを示されたものであろう。

写真や絵を読み取る能力は、言葉と同様に、読解・表現方法として、「書く力」を高めるための一つの手段になりうると考える。「写真」は様々な現実を映し出すものであるが、その写真を見る者の感じ方によって、解釈は異なる場合も多い。絵についても、個人の感じ方やそこから読み取る解釈は多種多様であろう。それらの解釈の違いを言葉で「書き表し」伝え合うことで、考えの拡充・深化が行われるとしたら、それは国語科において、文字同様、個々の解釈の対象になるのではないだろうか。「写真や絵を見る」という行為に、「写真や絵を読む」という認識をもたせ、自己の価値観や他者の価値観を交流させるという言語活動を設定すれば、それは国語科の授業として十分価値のあるものになるのではないか。そこで、写真や絵を活用した学習が、「書く力」へと結実する可能性を探りたい。現在の教科書を見てみると、写真や絵を活用した教材が増えているが、それらが系統的に整理されているとはいえない現状がある。そこで、国語教育において、図像テキストとも呼ばれる写真や絵をどのように活用していくことが「書く」力の育成につながるのかについて、発達段階を踏まえ、系統的に整理していきたい。

本稿では、国語科における「写真や絵の活用」に関する先行研究と、大学の授業（2年生「国語科指導法」）での学生の様子・作品・振り返りシートを分析し、写真や絵を活用した授業において育成できる能力について考察したい。

1 大村はま氏の実践から考える

写真や絵を活用した学習を実践した一人に大村はま氏²⁾がいる。1975年6月、石川台中学校において、「単元 いきいきと話す」に四コマ漫画『クリちゃん』（根本進・作）を使用して授業を実践している。「話す・聞く」単元の学習として設定されているが、「書く活動」へと繋がっている。

大村氏は、「よいことばをつけよう いきいきと話そう」という単元として、以下のような学習活動を設定している。

- 1、「クリちゃん」を見る、よむ。
- 2、場面の説明を書く。
- 3、言葉を考える、書く。（「おもしろい」は使わない。文を短く、読点で続けない。）
- 4、言葉を考え直す。練る。
- 5、発表する。

本実践の動機として、まず「いきいきと話す」ことにふれ、生徒の実態を「本当の人間の言葉になっていない」「心から話さない」と挙げている。さらに、生徒の実態を「なんのためか、誰に話しているかを意識せず、聞き手とは別の世界に身をおいて、既製品を出すだけ出している感じ」と述べている。「特に話したいことはないが、仕方ないから話す」といった感じだろうか。そこに話すことへの主体性は感じられない。中学生という発達段階からしても、進んで生き生きと話すとはいえないだろう。しかし、授業においてどうかしてそのような場面を創り出すことができないかと考えられたと推察する。教師として、生徒が「自分の言葉で、自分の考えや思いを生き生きと話す」ことを切に望まれ、そのような場を授業で探ったものであろう。「心から話す」場面について、「何か珍しいと思ったり、面白いと思ったりすると、子どもはすぐ話したくなる」と考察し、そのような教材がないかと子どもの身の周りの普段の様子を見つめ、そこから見つけ出された実践のようである。なぜ「クリちゃん」なのかについて、大村氏は「いきいきと話すには、話のたねが受け売りではいけない。そこに何か、自分の発見したもの、自分のとらえたもののあることが大切だ」と述べられている。内容に興味を持つ視点として、一面的な読み取りしかできないのではなく、自分なりの発見や自分なりの考えをもつことができる内容であることを挙げられている。そこには、自由性が存在しているといえる。そして、「よむ、想像する、場面をえがく、いきさつを理解する、描かれていないものを考える、心情にふれる、この背後にあるおとなの社会、世の中をのぞき見る、チクリと心をさされる実感がある、面白さがこみ上げる、何の意味かなあと考えが止まる、見直す、比べる、さまざまな精神の活動がしらずしらずさかんになり、ぼんやりと、どのようなふうにも頭を使わないでいる生徒はいません。」と続ける。

つまり、子ども達の多様な考えを引き出すことができる内容であれば、生徒は自発的に考えるようになるということだろう。それぞれが、4コマの絵から自分の生活や経験と結びつけながら場面の様子を想像し、

自分なりのストーリーを作る。考える過程でも、言葉を創造、さらに話し言葉、書き言葉として、言葉を輩出していく。「クリちゃん」が、単に「子どもたちの興味・関心をひく漫画であるから使用した」のではなく、「生徒の表現を引き出す教材として価値があるのか」という内容を吟味して使用したことが分かる。

次に、それぞれの学習過程での生徒の思考、言葉の創造について考える。

1、『クリちゃん』を見る、よむ。(図1)

生徒は場面の様子を想像する。場面の絵を手がかりに、自由にその背景までも想像することができる。そして、4コマの絵の変化を捉えながら、自分なりのストーリーを作る。場面を思い描き、そうだったいきさつを考える。実際の絵には描かれていないが、推測できることまで想像する。だから「よむ」と表現されたのだろう。その際の登場人物の心情について、自分なりの考えをもつ。自分の経験や家庭での出来事等から、実感をもつ場面に出くわし、さらに想像豊かに考える。

2、場面の説明を書く。

1において考えたことを、自分なりの表現で言葉にする。場面の様子であるので、ストーリーの流れに沿って、大まかな様子が分かるように書けばよいのだろう。1で、しっかり想像し自分の考えを整理すれば、言葉は容易に出てくるに違いない。

3、言葉を考える、書く。(「おもしろい」は使わない。文を短く、読点で続けない。)

それぞれの絵に合った登場人物のセリフを考えていく。場面を見直す、前後を比べるなどの活動を繰り返す。その際、実際に描かれている絵の内容(事実)から、登場人物の気持ちを想像し、自分の経験とも結びつけながら、言葉を創り出していく。そこには、間違いはないため、自分のユニークな考えさえも受け入れられる自由性がある。「おもしろい」は使わないという条件があるため、自分の語彙の中から言葉を捻出する必要もある。

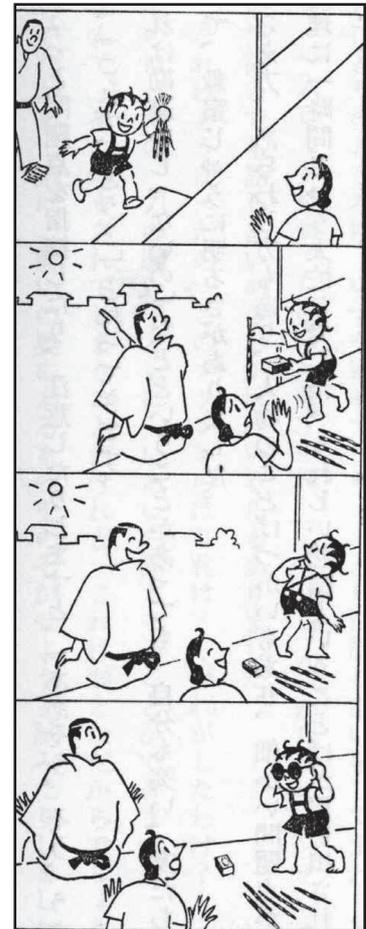
4、言葉を考え直す。練る。

この過程において、自分自身で推敲したり、友達と交流したりしながら、漫画に合った話として、より精度の高いものへと練り直すことができる。「考え直す」「練る」ということを一つの学習過程として提示されていることで、「書いたもの」へのこだわりをもつようにもなる。「ぼんやりと頭を使わない生徒はいない」という大村氏の言葉から、生徒が意欲的に考え、自分なりの4コマの話を創造している様子が伺える。

5、発表する。

漫画の絵を見せながら、作った話を伝える。

表1の生徒作品は、早く花火をしたいと思った子どもが、「まだ明るいから、暗くなったらしよう。」という両親との会話を通して、暗くする方法として、サングラスをかけてきたというユーモアを表したものである。生徒自身にとっても、花火が身近なものであり、早くしたいと暗くなることを待った経験もあるからこそ、クリちゃんの気持ちを推測し、サングラスをかける行動に同感しながら、セリフを考えることも



【図1 クリちゃんの漫画】

【表1 生徒の作品】

＜生徒作品＞「これなら暗いよ」	
(1) (クリ)	「ママ、花火！」
(ママ)	「よかったわねえ。暗くなったらやりましょう。」
(2) (クリ)	「ねえ、やろうよ。」
(ママ)	「まだ明るいわよ。」
(パパ)	「お日さまが、あんなに高いだろ。」
(3) (クリ)	「……………」
(ママ)	「夕ご飯を食べてからね。」
(パパ)	「そうだよ。」
(4) (クリ)	「サングラスをかけてくる。」
(クリ)	「これなら、暗いよ。」
(パパ、ママ)	「まあ?!」

できたのであろう。クリちゃんは、このほかの作品も生徒にとって身近で想像しやすい4コマの絵で描かれている。

この単元は、「いきいきと話す」ことをねらいとした「話す・聞く」単元として設定されていた。しかし、「想像したことを書く」「より分かりやすく書く」という「書く」活動も取り入れられていることから、「書く」目標を設定することもできたと考える。大村氏はこの実践の場合、「生徒が心から話す」ことを望み、生徒の実態を鑑みてクリちゃんという漫画を使用し「自然に話したくなる場」を探り、生徒の主体性を第一に考え授業を計画したのである。そして、その結果を以下のように説明している。

てびきでわかりますように、「いきいきと話す」が第一目的、主要目的ですが、この学習は、国語科の学習として、国語の様々な能力をつける自然の場を得ました。ことばの生きた力は、このように、ことばの生活の一部として、自然な必然の場を得ているとき、わざわざそのために設けたのではなく、一つの実際の言語生活が行われていくなかで、実際に必要になった場で、その言語活動をすることが、ほんとうに生活のなかで活用できる実力をつけることであるわけです。(p335)

大村氏は、この実践を通して、子どもに多くの力をつけることが可能であったとしている。つまり、「書く力」を重点的に育成しようとするれば、ねらいを「書く力の育成」において指導を焦点化すればよいということであろうか。また、場の設定の仕方にも言及されている。「自然な必然の場」である。言葉を自然に使用する、使用したくなる場だと考えられる。「わざわざそのために設けるのではない」としている。もちろん授業には教師の意図やねらいがあるわけだが、児童生徒にそれをなるべく悟られないように、「自然に言葉を使う場」を設定する必要があるということであろうか。そのような場で行う言語活動こそが、実際の生活の中で活用できる言葉の獲得に重要であるとしている。最近では、暗記や練習で基礎的・基本的な力は身に付けているが、実際にその力を必要な場面で活用することが難しい児童生徒が多いといわれる。真の言葉の獲得のためには、「自然に言葉を使用する場面の設定が必要だ」ということである。さらに、大村氏は本実践により、以下のような多くの能力を育成することもできたと振り返っている。

- ①話す力…*全体を中心を捉えて、ひと言で言い表す力
 - *話の概要を説明する力（しかも、くどくなく、長くならないような説明）
 - *話し方「ま」の取り方、「ま」を取る力、生かす力。人物、気持ち、場面をうつし出す会話の仕方、イントネーション、はっきりした発音
- ②聞く力…*しっかりと聞き洩らさないように聞く力
 - *次々と新しくよく聞き続ける力
 - *聞き取って、その言葉の気持ちを考える力（考えて聞く力）
- ③言葉遣い…*敬語の使い方
 - *親しみのある、甘えない話しぶり
- ④読む力…*繰り返し読み、話の筋の発展を捉える力
 - *表現されている者のかげ、奥を読む、状況による言葉の意味の変化に気付く力
- ⑤書く力…*場面の簡単な説明、会話の書き表し方、
 - *表記の仕方（話しことばの調子をできるだけ生かすように書く、句読点や符号の十分な活用によって表す工夫）
- ⑥書写力…*字配り、字の丁寧さ（自主的に）

「書く力の育成」という視点から考えると、4コマ漫画という絵を使用する効果については、以下の力として見取することができる。

④の読む力については、「書く力」の取材力と捉えることもできる。前出の浜本氏が話されていた「絵を読む力」と同様のものである。絵は、読み解くことで言葉を創り出していくことができる。絵に描かれている概念や内容ともいえるものを、言葉に言い換えるのである。それは、書きたい物を見つけるという「取材活動」を行っているともいえる。例えば、クリちゃんの絵には様々な要素が描きこまれている。「クリちゃん」「花火」「太陽」「サングラス」等、単語で置き換えられる要素である。このように言葉に置き換えること自体が、すでに「絵によって言葉を創る」取材活動になっている。つまり、絵に書かれている視覚情報を「クリちゃ

ん」「花火」「太陽」「サングラス」等の言語情報に変換しているのである。また、1コマ目の絵の「クリちゃんは、左手に花火をもって笑っている」等の様子を表す言葉も見たままの様子を言葉に変換しているといえる。しかし、「その花火を買ってきたのか、それとも近くのおじさんからもらったのか」等は、読者が想像できるものであり、自分の生活や経験と関連付けて考え、言葉に変換するという行為により、読者が自由に決めることができるものである。そこに描かれている男の人と女の人が「お父さん」「お母さん」であろうということも、服装や表情、場面の様子を想像しながら関連付けて考えたときに生み出されてくる言葉である。2コマ目のお父さんが困り顔で太陽を指さしている様子を読み取ると、太陽（明るさ）を理由に、花火ができないことを伝えようとしている場面を想像し、例えば「まだあんなに太陽が明るく照り付けてるから、花火ができるわけないだろう。」というセリフを考えることもできるだろう。その表情が困り顔であるか、笑顔であるかによって、場面の様子やセリフの内容が変わるだろう。つまり、読者は絵を見て、様々な要素を関連付けて考え、言葉に置き換えるのである。

絵を読むということは、誰が置き換えても同じ言葉になる場合（書かれているものをそのまま単語として置き換える場合）もあるが、諸要素を関連付けて考え、人によって言葉が変わってくる場合（個人により絵の関連付けの仕方に違いがある場合）もあるということになる。それだけに、個人による絵の読み取り方の違いがあり、面白味も増すといえる。このように、「話の筋の発展を捉える書きたいことを見つける力」や「表現されている者のかげ、奥を読む、状況による言葉の意味の変化に気付く力」は、一見「読む力」のようであるが、実は「書く力」の取材力に当たるものではないだろうか。

クリちゃんの場合は、4コマの絵でストーリーがあること、さらにそれが生徒にとって身近でその様子を想像できる内容であったことで、「絵を多面的に読み、書きたいことが多く見つかったことから、取材活動が上手くいった」ということになるだろう。「絵を読み、場面の様子やそこでの人物の様子や会話等、想像を膨らませた取材活動」により、「伝えたい」という思いを高め、「書く」活動へも自然に繋がったと考えられる。

さらに大村氏³⁾は、図2のような写真を活用した「書く」活動も実践されている。

「一、練習」は、生活の断片の出ている絵や写真を見て、そこに出ている生活でも、その中の一つの心持ちでも、何でも書く練習です。一枚ずつ全部違った絵や写真で練習します。この練習を「なんでも書きます」と名づけています。何を見ても、それをことばで書いてみるという練習です。私たちの見聞するもの、実際に見たり聞いたりするものの範囲がせまいですから、少しでも、間接にでも、経験を広くし、色々なもの、情景・表情・会話などを書いてみたい。ことばの数をふやすという面にも、役立てられたらば、という考えで試みている小さな練習の一つです。

これも、上記の「絵を読む」活動と同様、「写真を読み書きたいことを見つける」活動を通して、「書く力」をつけることができた学習である。写真に映し出されたものから想像を膨らませ、言葉に変換して表すといった「書くための取材力」が「記述力」の育成に繋がったといえる。

学習活動は、以下のとおりである。

1、作品例を壁に貼って、見せるだけで学習に入る。

<写真の説明>町の一角、たぶん画面の子供たちの近所であろう。兄が妹を描いている。妹は正面、行儀よくすわって手も膝に置き、少し首をかしげて恥ずかしそう、でもうれしそう。兄は学帽から中学生、そして下級生、たぶん一年生であろう。八分どおり描けた画面が大きく写されていて、兄は画板を支える手先と、横からの頭の半分も写っていない。



【図2 使用された写真】

【表2 生徒の作品1】

①あいつ、美人に書けてるだろう、なんて思ってさ、ニタニタしてるんだぞ。さっきからキョロキョロしてばかりいてさ。きっと見たいんだぞ、この絵。
あいつ、あんまり美人じゃあないけど、この絵の方が、もーっとひどいもんなあ。「知らずが仏」って感じかな？
でも、ほんと見せない方がいいな。泣きだされたら、それこそ災難だもん。
どうせ、おれがおこられるんだから。
女のくせに、かあちゃんのゲンコツ、痛いもんなあー。

この生徒は、兄の思いを言葉にしている。うれしそうな妹の表情から、その気持ちを「美人に書いてもらってうれしいのだろう。」と想像している。静止画であるのでキョロキョロしているという動きは描かれていないが、動きまでも想像していることが分かる。これは、写真に写っている事実から、さらに想像を膨らませ、「こうしているかもしれない」「きっとこういうことだろう」と、発展的に考えているといえる。この生徒の場合、「きっと美人に書いてもらったこの絵を見たいのだろう」と兄の考えを表出させている。でも、実際には美人には描いていないので、「知らぬが仏」見せたら泣くだろうと、その先の妹の様子まで想像している。そして、最後には、妹が泣いたらお母さんに怒られる場面を想像し、「ゲンコツが痛い」と、この生徒の実生活と結びつけたのだろうか。具体的な「妹を泣かせる」→「母からゲンコツをもらう」→「痛い」と言葉を綴っている。

また、表3の生徒作品は、妹の視点から写真を見つめ、言葉を創造している。

【表3 生徒の作品2】

②まぶしいなあ おめめつぶっちゃおうかな 　　でもやっぱりやめた
だつて おにいちゃんが
アタシのおめめ　すずめの目みたいに可愛いつて　言ったんだもん

くたびれちゃったなあ　おてて上にあげちゃおうかな　　でもやっぱりやめた
だつて　おにいちゃんが
おっかない顔してにらむんだもん

のどかわいちゃったなあ。
お台所に走ってつてお水飲んでこようかな　　でもやっぱりやめた
だつて　おにいちゃんが
お絵書きし終わったら、何でも好きな物あげるつて言ってたもん

早く終わらないかなあ　あきちゃった
おにいちゃんに言ってみようかな
まだ？　つて……

でも　やっぱりやめとこう

「まぶしい」とは、太陽の光が入る部屋のまぶしさをイメージして言葉にしているのだろうか。また、「すずめの目みたいに可愛い」と比喩を使用しながら表現している。「くたびれた」「のどかわいた」と妹が長く絵のモデルをしている時の気持ちを想像しながら、したいことを綴っている。しかし、「やっぱりやめた」と、繰り返す。そして「だつて　おにいちゃんが」と、おにいちゃんがしそうなことや言ったことを自由に想像しながら、文章を続けている。そして、最後は「やっぱりやめとこう」と繰り返し使用した「やっぱりやめた」の表現を変化させて使用し、余韻をもたせて文章をとじている。

以上の作品から、「書く」活動を行う際に、写真を用いることで、生徒は想像豊かに多くの言葉を創造していったことが明らかであり、その効果を見取ることができる。

以上、二つの大村氏の実践について、写真や絵（4コマ漫画）を活用した国語科の授業として目標を立てるとしたら、どうなるだろうか。写真や絵の内容から自由に想像したことを友達に伝えるために、文章で分かりやすく表現する学習である。さらに、その際、大切にしたいこととして、生徒の意欲の高まり、自然に言葉を使いたくなる場面が挙げられるのであるから、以下のような学習目標の設定が可能であろう。

(1) 写真や絵に描かれている情景を基に、場面の様子や人の気持ちを自由に想像することができる。〈想像力の育成〉

(2) 写真や絵から想像したことを基に、絵に合った話を書くことができる。〈表現力（書く力）の育成〉

(3) 写真や絵から想像したことを、進んで聞き手に伝えようとする。〈主体的に学びに向かう態度〉

二つの実践では、まず(3)の意欲面を重要視したものであったと述べられている。初めの実践では、生き生きと話すように、そして次の実践では、「書き慣れる」ということばで「どんどん書いていく」ということがねらいであることが分かる。しかし、「書き慣れる」→「書き方を教え、書く目的に合わせて、効果的に書くことができるようにする（これは、学年に応じて「書き方の指導」のねらいが変化してくる）」のどの内容をねらうのか、教師が授業のねらいを焦点化していけば、「書く」能力を育成できるのではないだろうか。写真や絵を活用を、「書く力のうちの取材力を高める」という視点をもてば、「書く力」の育成の初めの段階として重要であり、「書き慣れる」の前に来るだろう。まず書く意欲を高めるために写真や絵を活用し、書き慣れたところで、「構成力」や「記述力」に関するねらいを吟味して授業を行えば、「児童・生徒の意欲を高めながら、書く力を育成できるのではないか」と考える。

2 大学での授業実践から考える

「国語科指導法」（2年後期 受講者106名）において、写真や絵を使った教材の指導法について、実際に学生に授業を行った。〈光村図書5年 表現を工夫して物語を書こう「一まいの写真から」(書く)〉の学習⁴⁾である。

本単元は、小学校学習指導要領解説 国語編⁵⁾ 第5学年及び第6学年、「B書くこと」の指導事項「ア 目的や意図に応じて、感じたことや考えたことなどから書くことを選び、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝えたいことを明確にすること」「ウ 目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりするとともに、事実と感想、意見とを区別して書いたりするなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫すること」の内容を受けて設定できる。言語活動例(2)「イ 短歌や俳句をつくるなど、感じたことや想像したことを書く活動」を基に、写真から想像を広げて、「起承転結の構成で表現豊かにオリジナルストーリーを書く言語活動」として位置付けることになる。一枚の写真から想像を膨らませ、写真を出発点とした物語を書く、そして、全員の作品を集めて、クラスの短編集を作るという活動を設定した単元である。写真は、図3の7枚に限定されるが、選択の自由性はあるため、個々の発想が活かされ、「自分だけの物語を書く」というオリジナル性も加わり、児童は意欲的に取り組む内容である。

学習活動としては、次の4つが設定されている。

- ①写真(図3)を選び、想像を広げる。(イメージマップを示しながら)
- ②物語の構成を考える。(構成表の例を示しながら)
- ③表現を工夫して、物語を書く。(これまで読んだ物語の工夫を思い出しながら)
- ④短編集を作って、読み合う。

この授業では、写真を選ぶという選択性から、書きたい物語についての想像が膨らみ、書く意欲は高まるだろう。

学生には、本単元は「これまでの学習を生かして、1枚の写真から想像したことを基に物語を書く学習であること。読み手をひきつける山場を考えた起承転結の構成で、想像した出来事や、風景、人物の気持ちなどを描写する表現を、これまでの読書経験や生活体験などで得た情景や自分自身の心情なども生かしながら

が嫌いでも、物語をつくるという活動を通して、楽しく書きながら学ぶことができるようにしたいと思いました。」等、小学生の頃に受けた授業を思い出したり、授業にはきちんとねらいがあることに気付いたりしながら、自分が教師になって授業を行うイメージをもっている学生もいた。さらに振り返りの中に、多くの学生が「読み合う楽しさ」を挙げていた。「たった1枚の写真でも、こんなにたくさんのお話を作ることができることを学びました。グループで読み合った時、6人ぐらいいたのに誰一人かぶらなくて、本当に色々な話や展開があって、とても楽しいなと感じました。」「こんなに真剣に物語を書いたのは大学生になって初めてでした。発表し合うのは恥ずかしかったけど、いざ発表し合うと、同じ写真から書いたとは思えないほど、たくさんのお話が出てきて楽しくなりました。」「同じ写真でも違ったお話になり、どれも優しさや温かさにあふれた素敵なお話でした。友達の発想や視点、表現の工夫などに感動しっぱなしでした。1限からとても幸せな気持ちになりました。本にして持って帰りたいです。」発表の恥ずかしさを挙げながらも、交流する楽しさに言及した振り返りが多く、一人一人から生み出される物語が異なるからこそ、それを伝え合う楽しみもあるということである。これも、写真を活用する効果であるといえる。

一方、「私のような大学生でも簡単には書けないので、小学生に対しては指導することがたくさんあると思った。」「1枚の写真からお話を創るという活動は、あまりなじみがなくて、これまでもしたことがありませんでした。でも、国語の時間に授業として行うことで、普段の生活ではあまり意識することのない、話の順序や想像力など、忘れがちだけれど大切なことを学ぶことができるので、きちんと計画を立て指導することで貴重な時間になると思った。」と、具体的な指導方法について思い描き、その難しさを感じている学生もいた。

国語科の「書く」指導において写真や絵を活用することは、文章を読解した上で自分の考えを創り出すことには抵抗のある児童も、比較的抵抗なく取り組むことができるため、「書く」ことへの意欲づけには効果的であるといえる。しかし、ただ提示するだけでなく、その際の留意点をまとめる必要がある。また、国語科において育成すべき「書く」力の内容は多岐にわたる。書きたい内容が思い浮かんでも、それが整理でき記述できなければ、文章にはならない。写真や絵の活用は、「題材の設定」「情報の収集」「内容の検討」との関りが大きい、「考えの形成」「記述」の指導内容も関わってくるということである。今後は、それらの点についても検討していきたい。

<引用文献>

- 1) 『国語教育研究No.570』(2019) 日本国語教育学会 p.63
- 2) 大村はま『大村はま国語教室 2』(1983) 筑摩書房 p.324
- 3) 大村はま『大村はま国語教室 5』(1983) 筑摩書房 p.200,p.279
- 4) 「国語五 銀河」(2018) 光村図書p.224
- 5) 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 国語編』(2018) 東洋館出版p.139

**One consideration about the language arts instruction is
to raise the student's will to write
— Effective inflection of a photograph and the picture —**

Yukari UCHIDA

Department of Education and Psychology, Faculty of Humanities, Kyushu Women's University

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

Abstract

I compiled this article for a class to raise the child's motivation to write. Therefore, I thought about an inflection method of the personal photograph and picture of the child. I look at a photograph and a picture to write a report on it. I imagine that it is drawn there and interpret it for myself. It is necessary for students to express imagination through words in language arts. The sentences that children write display a variance in personal thought and experience. A sentence has the ability to allow students to express themselves freely. This increases my enjoyment when reading their completed work. I could understand the student's writing much more easily. There is the advantage to have little resistance to what the child writes. However, the will to write increases, we must continue to evaluate and provide instructions. I must continue to study the method in the future.

Keywords : Will to write, Inflection of photograph and the picture , Imagination